

事は、全く倉橋先生の御指導による賜物なり、今本誌五月號先生の、保母と園藝趣味なる記事を拜讀して今昔の感を深くす。此在職中の園藝趣味は今尙忘るる事出來ず、引退後は、京都市外嵯峨に茅屋をしつらへ、草花の培養を唯一の樂みとし、其發育もよく、切り花などは、知人に贈りて喜こばれ、此嵯峨の地は冬期寒氣強く病體に適せず、園藝も閑なる時となりて、舊冬上京、本年一月鎌倉なる親戚の廣き邸宅に移る手傳ひを兼ね此暖地に靜養かたがた計らずも今日に至る。此鎌倉の地は冬も暖かく、天氣のよき日は、海濱にて幼兒の砂遊びを爲し又貝類を拾ひて遊べる様は、他の地方に於ては見られざるものなり。春陽の季節を迎へては、徒らに過す事出來ず、其新邸に新らしき花壇を造り、其砂地に適するいろ／＼の種子を蒔き或は苗を植ゑ球根などを培養するに、其發育よ

かば、之れが趣味をもたらし主人初め子供等の漸く、園藝趣味を起こし、當今では家族之れに沒頭するに至り、新設の花壇とは見えざる程の美觀を呈せり、又盆栽物も數鉢も成育よく、之れと切り花とは常に食卓に裝飾せられて、一同は食事しつゝ、園藝上の話をなし、此自然美より互に心情を融和し一家團欒の樂を爲す事となり、實に此自然より受くる偉大なる作用は、幼兒の上のみならずして、大人間にも効果ある事を感ず、終に臨みて末筆夫禮ながら、本誌每號に、大岩金先生の園藝に付ての培養上培富なる學理と、其御懇切なる御指導的説明の大に私共の園藝に利益をお與へ下さる處多く謹んで御禮申上感謝の意を表す。

葡萄 菊

新 庄 よ し こ

今朝幼稚園へ來てから保育實習生の一人と幼兒

三人とで葡萄を買つて来てお盆にのせて机の真中に置く。

グループの一

遊戯室から歸つて來た幼兒室に入り、このお盆を見つめながら腰かける。このグループ口數少ない子ばかり集つてゐる。誰か一人でも何か云ひ出すかと思ふに、いかにも不思議そうで、——家では見なれてゐる葡萄でも——お辨當のほかに食べるものが机の上に置いであるいかにも變だといふ表情皆の顔にありありと見る。何も云はない。しかたがないから

「これなあに」

「ぶだう」

「ぶだう」四五人つゞいていふ。中にはそんなものとつくに知つて居ると顔の子あり。

「なつてゐるの見たことあつて?」

「ない」

「ある」よくきいて見ると店にあるのを見たといふ話、

「私、繪で見たことあるわ」

そこで室の窓から見える藤棚と一緒に見ながらぶだうの房をぶらさげて見せる。幼稚園にもぶだう棚があつたらいいなと思ひながら。

「すき?」遠慮しがちにうなづく。すき? ときいた以上食べさせなければと思つて、食べませうねと云ふと、嬉しそうな顔する子あり、中には、家では食べるけれどこゝでは厭だといふ。洗つてあつたので六つ位づゝわける。

「皮と種は出すんですよ」三人はペロリとたべてしまつた。二人はたべかけてなか／＼食べてしまはない。殊に一人は一つのたまを舌の先でころころさせて樂しみ／＼ほしみつゝニコ／＼してゐる。あの二人は食べなかつた。ついうつかりし

てどんな味だつたかさくのを忘れてしまつた。

グループの一 六人

良 「やあ、ぶだうがある」

謹 「是、何し(す)るの」

保 「謹一郎さん、これすき?」

良 「謹一郎さん考へてるね、僕ね、毎日パンの前にきつとぶだう食べてるの」

保 「正雄さんは」

正 「僕、食べちゃいけないの、だから知らない」

良 「僕の家になつてんの、青ぶだうが」

正 「僕も見たことはある」

保 「どこで」

正 「富浦で」

良 「ぶら下つてゐるよ、竿でつつかへぼうしてあ

るよ」

この間良一さんは時々首をぢぢめて顔中笑にし

て話をしてゐる。

涉 「僕食べないの、僕もらつて行かうかな」

○ 「バスケットがないから持つて行かれないとや

ないの」

正 「ち辨當はあさつてからだから腐つちやぶね」

良 「そしたら又いいのを持つてくらやぶる」

皆に少しづゝ分ける。良一さんと信夫さん隣り合つて腰かけてゐてつい二人ともとなりのを食べてしまふ。

良 「よせやい、まちがへた、アハ……」

涉 「僕、もらつて行かうかな」又、涉さんがいふ。

「どう、おいしいの」皆うんといふ、それぢや

味がわからない、あまりのすっぱいのときく。

「あまい」

「すっぱい」

「信夫さんそんなに笑つてばかりゐないで、ど

つち、あまいの、すっぱいの?」

「ウフ……、甘い、すっぱいウフ……」

良 「一等おしまひが一等おいしかつた。是ね、上からナヨキツと切つてざるにいれるのね」

○ 「この中二人はたべなかつた。」

グループの三 六人

ち 益を見てうれしそうにはいつて来て章江さん

章 「これね、皆たべないでお汁ばっかりたべるのよ」

房 「私、なつてゐるの見たような氣がするけど忘

れちやつた」

章 「小父ちゃんがとつても澤山たべてお腹こはしちやつたの、私ね、これ魚やさんで見たの」

保 「魚やさん？」

章 「えへ、魚やさんのお屋根になつてゐたから母ちゃんが教へてくれたの、お店のお屋根よ」

八百屋さんと間違へたんだやないのと聞かないでよかつた。

○ 「まあ上げませう」

「うん」

○ 「僕、林檎と梨しか食べないの」

○ 「あまいね」

○ 「あまいね」

グループの四 六人

房 「甘いと酸つぱいとまだつてる」

不 「昨日お家の兄様學校で葡萄の種類しらべていらつしやつた」

「そう、あなたはなつてゐる所見たことあつて？」

不 「えへ、たゞね、ぶらさがつてゐたの」

「どこで」

「三崎に行く途中で」皆に食べさせる。

○ 「たうへへ、食べちやつた」

俊 「僕、食べないの」

「おう、食べてごらんなさいな、どう、あくし

じ？」

貞「これほうづきのかはりになるの」

俊「始め甘いけど少したつとすっぱいね」

○「すっぱいね」

儀「おいしい、両方だ、甘いのと酸っぱいのと」

——右保育日誌の一節。六歳児——

かう書いて見ますと、「だからかうだ」といふ何物もなくわながらまことにたわいの無いやうな氣がしますが、もの或はことに對して幼児がどう動いてくれるかといふことをみるにはようございました。

猶葡萄そのものに就いての委しいことは繪でも描かせる時に、葉やつるを添へての折にゆづることにしました。

臨海保育の所感

岸和田市幼稚園

伸びて行かう、手も足も出來得る限り伸びさう

として止まぬ子供達を、ほんとうに心ゆくばかりのんびりと自由に何の拘束もない環境に於て遊ばせてやりたいとは、常々考へてゐる所でありましたが、愈々今年の炎熱が私共の臨海保育の動機を興へさせました。こゝに於て保育時間短縮と同時に、園から約四町程隔てた海濱に不完全ながらも四十坪ばかりの（幼児百六十人）バラツクを建て東方を葦簾にてかこひ内部の二方に帽子・鞆掛け・腰掛等据ゑつけ、ござ及日々の必要品は一定の場所にしまつて置きけす。其他の臨時必用品は、小車で運ぶこととしてゐます。

毎朝八時出席調べをして出かけます。風の風いだ静かな茅渟の浦ルリ色に碧空、さながら鏡と鏡、かすかに浮ぶは淡路島波間近くたはむれる小鳥も見えます。幼児達は「先生あれ何といふ鳥？ お空がきれいやなーうちすきやぞ」など話し合ふ折から、白き小蒸氣ボッボッといせいよく通り過ぎ